

『生きられた家』再読

文：長谷川豪・能作文徳・長島明夫

多木浩二【たき・こうじ】1928年神戸市生まれ。東京大学文学部美学美術史学科卒業。建築、美術、写真などの文化的事象から、哲学・思想、大航海の歴史や戦争論など幅広い執筆活動を行う。2011年4月13日、肺炎のため82歳で逝去。(pp.110-111に著作歴を掲載)

多木浩二『生きられた家』の変遷

- 『家 meaning of the house』写真：篠山紀信、潮出版社、1975.10
- 『生きられた家』田畑書店、1976.9
- ……改訂版『生きられた家——経験と象徴』青土社、1984.3
- ……改訂版『生きられた家——経験と象徴』青土社、1993.3
- ……新装版『生きられた家——経験と象徴』青土社、2000.3
- ……文庫版『生きられた家——経験と象徴』岩波現代文庫、2001.2



四月十三日に多木浩二さんが亡くなった。多木さんの主著のひとつである『生きられた家——経験と象徴』を、年の近いふたりの建築家とともに読み直してまもない頃だった。だから多木さんの訃報に端を発するわけでは必ずしもないのだが、ここでは、一九七六年の刊行以降、改訂を重ねながら日本の建築界に大きな影響を与えたその本を、いまどのように読むことができるのか考えてみたい。おそらくそれはこの「建築の持ち主」という特集においても意味のあることだと思う。

『生きられた家——経験と象徴』は全六章にエピソードが付く構成になっている。今回は長谷川、能作、長島の三名が、それぞれ章ごとに個別に担当して、なんらかの文章を執筆した。そんな全体の統一を無視したとも言える読み方をした理由は、この本のあり方に関係している。

本書の成立および改訂の経緯は「岩波現代文庫版へのあとがき」において多木さん自身が短くまとめているが、もともと本書の内容は、一九七五年に出版された篠山紀信氏の写真集『家 meaning of the house』(編

集・構成：鶴本正三、潮出版社、定価三万円、絶版)に対して、多木さんが寄稿した文章を基礎にしている。その企画の発端については、写真集の出版直後、篠山氏との対談のなかで次のように語られた。

一番最初に拝見したのは、ずいぶん前に篠山さんの事務所に初めてうかがったときです。たまたま家の写真がいっぱい重ねてあって、それを見たときにかなり印象が深く、もし写真集になるとすれば、ぜひお手伝いをしてまとめたいなと思ったわけです。それはまさに、いま篠山さんがいわれたとおりで、いわゆる民家らしい民家という問題の取り上げ方ではなくて、民家に行ってもその形や様式を撮らないで、その中で引っかけたなにかだけを撮るということだったんですから、そのへんに私は非常に興味を持った。ということ、家には人が長い間住みつくことによって生まれてくる、私なりなことばでいいあらわすと「生きられた家」というようなものがあった、それが篠山さんの写真の主題になっているように思えたので、それで私はいっしょに仕事ができたんじゃないかと思うの

です。(多木浩二・篠山紀信「紀信快談」『アサヒカメラ』一九七五年十一月号、一五三頁)

そうして寄稿された文章は、基本的に大判の写真集の一頁に収まるよう二千字弱に分量が揃えられた、二八の断章だった(二八編のうち一編のみ、倍の分量で見開きの二頁に掲載)。その各断章が、二四七頁(二七四点)の写真群に対して一頁ずつランダムに挿み込まれている。写真と文章との直接的な対応関係は、まったくくはないとは言えないが、多木さん自身も先の文庫版あとがきで「写真とは無関係に書いた長編のエッセイ」と述べているように、分析の対象になるほどのものではないように見える。

この断章形式のテキストが、翌年、順序の入れ替えと大幅な改変・加筆の上で全五章にまとめ直され、『生きられた家』(田畑書店)として刊行された。その後も、別の媒体で発表された文章が組み込まれるなど「全面的に書き直し」がされ、一九八四年に改訂版『生きられた家——経験と象徴』(青土社)が出版。一九九三年にも「結末のところだけを書き直し」た版に改められた。

このような改訂の内容を詳細に追うこと

は今回ままならないが、ともかく書籍化に際して体系的にまとめ直されたにせよ、『生きられた家——経験と象徴』はその成立の経緯からして、完結した全体像はなく、断片的な性質を強く帯びている。だからここでも、むしろ六つの章の単位ではなく、その下位である三〇の節ごとに読んだほうが適切と思えるくらいで、この文につづく私たちそれぞれの読みも、決して本で書かれた内容すべてを余さず受けとめているとは言えない。

本書の断片的・非体系的な記述は、部分同士が複雑な意味の網の目を構成し、読者にその都度さまざまな読みをうながす。それはまさに、そこで論じられている(生きられた家)と同じ構造であるだろう。また同時にそれは、「雑学者」を自称した多木さんの、多分野を横断する活動のあり方とも通じるように思える。私にはそれらの構造の相似性は、(生きられた家)という視点が多木さんの生に根づいた、多木さんにとって極めて本質的なものであったことを示していると思えてならないのだが、どうだろうか。(長島)

【はせがわ・ごう】建築家。1977年生まれ。長谷川豪建築設計事務所主宰。主な作品《森のなかの住宅》(SD Review 鹿島賞、東京建築士会住宅建築賞金賞)、《桜台の住宅》(新建築賞)、共著書『地域社会圏モデル——国家と個人のあいだを構想せよ』(INAX出版)など。

【のうさく・ふみのり】建築家。1982年生まれ。能作文徳建築設計事務所主宰、東京工業大学補佐員。主な作品《ホルのある住宅》(東京建築士会住宅建築賞)、共著書『WindowScape 窓のふるまい学』(フィルムアート社)など。
【ながしま・あきお】本誌編集発行者。1979年生まれ。